

大正時代の教育を回顧して

足利市教育委員会教育長 佐藤 里弘

私は大正7年4月、千葉県成田町の小学校に入学した。父の仕事の関係で1年の1学期で転校し、栃木県塩谷郡氏家町押上小学校に入った。しかしこれも2学期だけで、3学期は茨城県久慈町の小学校に移った。1年生の時3県を股にかけたことになる。印象に残っていることは、成田小学校の講堂で、朝礼の時に斉唱した歌である。校長先生も担任の先生も友達も、記憶にはない。

小さき砂の一粒も 積もれば富士の山となる

われらもたゆまず つとめなば

ついには登らん あの山に あの峰に

押上小学校では印象はほとんどない。

久慈小学校は6年を卒業したので、思い出は多く、なつかしいところである。

久慈小学校は高台にあって、眼下に太平洋を見下すことのできる場所であった。庭の中央に年経たぬ椎の大木があった。大きな洞穴があって、子供がくぐりぬけることができた。元お寺の跡とかで、鐘つき堂もあった。周囲には松の大木が枝ぶりよく並んでいた。

校長先生は渡辺清吉といって、画でみる乃木將軍のような風ぼうの持ち主であった。毎日のように始業前、昼休みには校庭に出て、こどもたちと遊んでくれた。直接授業をうけたことはなかったが、今でもなつかしく、親しみをおぼえている。久慈町出身で一校で終始したようであった。全国でも奏任官待遇になられたのは早いとか。過日母校をたずねたら、校庭の一角に胸像が立てられてあった。

教頭先生はこれまた久慈町出身で、荒川先生といって、温和なかたでした。教頭は当時でも事務が多かったのか、たまにしか校庭には出られなかった。

教務主任は、久慈町出身で山県安という先生でした。長身で、勉強家で、国語の辞書を出版しようと努力されていた。戦時中は青年教育に挺身され、戦後は追放になられたとか。この先生は高等科を担当されていたが、休み時間にはよく校庭に出られて、遊んでくれた。

大塚先生という若い先生がおられた。母校出身で、代用教員から検定で訓導になられた。眼鏡をかけて啄木を思わせる風ぼうの持ち主であった。当時はいつも5年生を担当されていたが、この先生は児童からたいへん人気があった。文学青年で自作の少年小説をよく話してくれた。5年になる時は、だれも大塚先生に担任されることを望んだ。私は残念ながら大塚先生の組にはならなかったが、受け持ちのるすの時など、話

しをしてくれた。昭和の初年満洲にわたられたとか、その後の消息はわからない。

安藤先生という、年配の女教師がおられた。作法を教えられたが、きびしい先生で児童からは、おそれられていた。おそれるというより、い敬といったほうがよいかもしれない。この先生の娘さんが、当時としては珍しく、師範学校を卒業して赴任された。母子でつとめたことになる。音楽を教えていただいたが、若い先生とあなどって、授業中に大きな声で皆がどなるように、歌ったので、おこって職員室に帰ってしまった。当時としては珍しい童謡など教えてくれた。

小学校時代を思い出すと、受け持ちの先生よりも、以上のような先生のおもかげがうかんでくる。何か人間的な魅力があったためではないでしょうか。児童とよく遊んでくれた。童話をはなしてくれた新しい歌をうたってくれた。きびしいが、温情あふれる先生であった。生涯忘れることのできない印象を与えてくれるような先生。教え子の中に生きつづけられるような先生。

今日の学校はまことに忙しい。忙しいといって、教育の本質を忘れて、枝葉にのみ力をいれていないだろうか。学制頒布百年、新たな構想をもって進むべきではないでしょうか。